
恋姫無双 曹丕伝

励行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双 曹丕伝

【Nコード】

N5172Z

【作者名】

励行

【あらすじ】

曹操の弟として生まれた青年の、長く険しい、しかし明るい戦乱の記録。彼はどのような道を歩み、その果てに何を見つけるのだろうか。

という長つたらしい駄文です。初投稿ですので適当に見守ってやってください。恋姫の二次創作です。キャラ壊しなどあったらすみません。

序（前書き）

主人公の名は曹丕。字は子桓。真名は華景といます。
このキャラ以外にオリキャラは追加するつもりはありません。
では、どうぞ。

序

漢王朝の時代。それは長く、平和で、そして腐っていた。

俺が物心ついた頃の漢は、特に酷い有様だったことを良く覚えている。

曹家に生まれ、曹丕という名と、華景かけいという真名を授けられた俺は、幼い頃から華琳 賢姉と共に母に連れられて洛陽に行くこともあった。

その時に見た光景を今でも鮮明に覚えている。

活気のない街。飢えた民。子供ですら虚ろな目で道端に転がっていた。

当時の俺はそれを見て、これが華の洛陽かと驚愕した。そして同時に、激しい憤りを感じた。

街を見ただけで分かる、腐った宦官達の行いに。

そして俺は、その頃から心に決めた。誰も飢えない、何者にも屈しない国を造ると。

賢姉にその話をすると、賢姉は笑って俺を撫でてくれた。

「そうね。必ず、強い国を造りましょう」

そう言ってくれた。

今思えば、あれが俺達姉弟の始まりだったのかもしれない。

それから俺達は、それまで以上に勉学に、武の鍛錬に励んだ。軍略を学び、政を学び、己の武を高めた。

夏侯惇　春蘭、夏侯淵　秋蘭の姉妹に出会って、皆が競いあった。

そして青年と呼べる年齢になった頃、俺は賢姉との決定的な違いに気付いた。

賢姉は非常に頭がいい。今までに学んだことを全て貪欲に吸収し、自分のものにしていく。

教えに来た老師を口で負かした時は流石にやり過ぎだと思ったが、そして武も、一兵卒では束になっても敵わないほどに強い。

かと思えば、詩を詠み、舞いを嗜む芸術家のような才能を垣間見せる。

人を惹きつける風格も、生まれたその時から持っていた。

まさしく完璧だった。賢姉に出来ないことなど、きつとないのだから。

それに比べて俺は、賢姉ほど頭が良いわけではない。

軍略に関しても政にも、賢姉には届かない。これからも届くことはないだろう。

詩も詠めないし舞いも不向き。その手の才能は皆無だった。

だが、そんな俺でも唯一、賢姉に勝てるものがあつた。

それが俺の武。

賢姉と同じ大鎌【断】では、賢姉にも、夏侯姉妹にも負けたことはない。

これが俺の誇りだ。誰にも負けない武。誰にも負けられない武。だから俺は、誓いを立てた。

どんな敵だろうと、どんな状況だろうと、俺は最後まで背中を見せない。

そう誓ったんだ。

華琳 side

陳留の刺史となつてから随分と経つた気がする。

思い返せばあつという間だったけれど、忙しすぎてそんなことをする暇も無かつたということか。

ふと窓の外を見ると、小鳥が二羽、仲が良さそうに飛んでいるのが見えた。

そういえば、最近は華景の顔を見ていない。

お互いに忙しいとはいえ、少し寂しさを感じる。

未だに弟離れできていない自分に苦笑する。こんな事では華景に笑われてしまうかしら。

でもそれはあの子も同じ。あの歳になつても昔と変わらず賢姉と呼んで慕ってくれる。

あの子は強い。だから心配はしていない。

最後の書簡を書き終えてぐうつ、と体を伸ばすと、扉が開いて秋蘭が入ってきた。

「華琳様、お疲れ様です」

「ええ。でもこれで一段落つけるわね」

「そうですね。兵のほうも練度は高まっています。姉者と華景様の賜物です。

それに、ようやくお二人にお休みいただけますから」

秋蘭の言葉に、私はともかく華景が休暇を取っていないことに呆れた。

本当にあの子は、無茶をする。

「華景様にも同じ事を言ったら、『賢姉は無茶をする』と笑っていましたよ」

「華景にだけは言われたくないわね、その言葉は」

それを聞いていて、自然と顔が綻ぶ。

流石は姉弟と言ったところかしらね。同じ事をして呆れあうなんて。

「だったら早く休もうぜ？ 賢姉」

扉から聞きなれた、しかし懐かしさを覚える声がした。

そちらを見れば、蒼い外套を身に着け、少し長い黒髪をうなじで纏めた青年 華景が、いつもと変わらない笑顔を浮かべてたっていた。

しかし、笑顔の目のしたには若干の隈があり、疲れきっているのがよく分かる。

「私はいいいから貴方こそ早く休みなさい、華景。顔が酷いことにな

「つてるわよ」

「いいや、俺より賢姉の方が重症だぞ。自慢の髪が少し荒れてる」

「今日はお風呂の日だから後で直すのよ。それに華景こそせっかくの外套が汚れてるわよ」

「後で洗濯するから問題ない。それより」

「お二人とも」

言い合う私達に、秋蘭の凜とした声が響いた。

言い争いに夢中になっていた私達ははっとして、秋蘭を見る。

秋蘭は真顔で、心なしに呆れているように見えた。

「お戯れになられるのは良いのですが、お二人ともこれ以上ないほどにお疲れです。」

今日はもう仕事はありませんから、早くお休み下さい」

「え？ 警邏と訓練はまだ終わってないぞ？」

「私と姉者で行っておきます」

「まだ政務が残っていたはずだけど？」

「急を要するものではありません」

「だったら鍛錬でも」

「今日は庭師が中庭の手入れをしておりますので、中庭は使えませ

ん
「

「なら兵法書でも読もうかしら」

「申し訳ありませんが、今は書庫の整理をしております」

是が非でも私達を休ませたいらしい。

あの手この手で私達が仕事に関わろうとするのを阻んでくる。

最後にはこちらが根負けして、ふう、とため息を吐いた。

「分かったわ。そこまで言われたら仕方ないわね」

「・・・・・・賢姉、その兵法書置こうぜ」

「華景こそその武器を出しなさい」

「・・・・・・」

私達はどこまでも仲のいい姉弟だった。

休暇 一（前書き）

あれ、おかしい。始まっていきなり休暇とか・・・。
ま、まあ、気にしないでおこう。うん。

まるで聞いちゃいないご様子の賢姉。清々しいほどの笑顔が痛い。

ああ、あの笑顔は俺にとって良くないことを考えてる顔だ・・・。

抵抗できない俺は、今日が無事に終わることを祈りながら賢姉に引き摺られて街に向かっていくのだった。

服屋。

それは服装を意識する女性にとって非常に大切な、どれほど時間をかけても足りないほどに重要な場所。・・・らしい。

「華景、これはどうかしら？」

「ちょっと背伸びしすぎじゃ　すみません何でもないです」

服屋。

それは、俺の寿命が削られ続ける恐ろしい空間である。

服屋といえば、賢姉は昔から断固として可愛い系の服を着なかった。ふりふりのやつとか、ふわふわしたやつとか。

その理由を聞いても笑顔で威圧されるだけで教えてもらったことはないが。

「賢姉ってもう少し可愛い系の服も着ればいいのに。綺麗系より似

合うかもよ?」

「貴方が着てみる? きつと素敵なことになるでしょうね」

人はそれを『見るに耐えない』と言う。

そもそも六尺(180cm)近い体格の俺がそんなことをした日には、俺はあまりの羞恥心と気色悪さに長江に身投げする自信がある。

というか普通に目に毒だ。

「ま、まあ、それは遠慮しとく」

苦笑いを浮かべて辞退すると、賢姉は残念ね、と呟いて再び服選びに戻っていった。

ここの服屋は初めて来たが、意外にも前にいた街よりも服の種類が豊富なことに感心した。

女性服専門だからなのか店員も客も女性ばかりなのがちょっと辛いが、それはいつもの事と視線を受け流す。

いままで散々こうした買い物につき合わされてきたために、こうした空気に耐性がついてしまった。

なんとも複雑な気分だが、役に立っているから良しとしておこう。

「これなんかどう? なかなか良いと思うのだけど」

「おおう、ちっと見え過ぎてないかい? 主に中が」

いや、流石にそれはないと思うぞ、我が姉よ。

それからあれやこれやと服を見て回って、気づけばそろそろ昼餉時となっていた。

服屋を後にした俺達は適当な（賢姉お勧めの）飯屋に入った。外装からして高そうな店だが、内装もこれまた高級感溢れるもので、奥は個室になっているようだ。

こんなところ来たら財布の中が素敵な事になりそうだな。

「これはこれは曹操様に曹丕様。ようこそいらっしやいました」

奥から恰幅の良い店主が揉み手をしながら笑顔で出迎えてくる。それに適当な返事を返すと、慣れた様子で奥の個室に案内された。賢姉はこの常連らしい。よく財布の中身が持つな……。

席に座って注文を済ませ、微妙な間が空く。

こうした間が空くと、何故か俺が話を振らなくてはならない使命感に駆られてくる。

別にそんな必要はないはずなのだが、無意識の俺は知らぬ間に話題を探して話していた。

「最近、近隣の賊共の動きが活発になってるらしいな。隣の州牧のそこは特に酷いことになってるようだ」

頭を捻っても仕事の話しかなかったのが残念だが、これも重要な話だ。

管路の似非占いが広まった後、それを待っていたかのように賊の動きが派手になりだした。

漢には期待していないが、各地の諸侯がそれを抑えられないほど無能だとは思わなかった。

これが何かの前触れかは分からないが、準備はしておいて損はな

いだろう。

「ええ、みたいね。それも気になるけど、もう一つ気掛かりな事があるのよ」

「んん？ 賊に関してか？」

「この間、豪族の屋敷に賊が押し入ったことがあったでしょう？ その時にその豪族が隠し持っていた書物が盗まれたらしいのよ」

豪族が隠していた書物、ねえ。

賢姉が興味を持つほどの物なら限られてくるが……。

「……太平妖術の書。聞いた事くらいはあるでしょう」

「んん……あるにはあるが、実在してたのか」

太平妖術の書というのは、持つ者によって価値が変わる奇怪な書物だったか。

何が書かれているのか興味はあるが、そんなものは無いだろうと思っていた。

「それを奪った賊が、まだこの辺りにいるかも知れないの。賊の討伐をするならついでに手に入れたいものね」

「さらつと言う事じゃないからな。でもまあ、確かに一度読んでみたくはあるな」

下らない内容じゃないことを祈る。

久しぶりの休暇も、結局仕事からは抜け出せない姉弟であった。

休暇 一（後書き）

予想外に長くなりそうだったから無理やり切ったけど、やっぱりおかしくなったかな？

次は季衣とか桂花とか、出したいなあ・・・。

一話（前書き）

ようやく書き終わった…。
桂花が何故かこんな性格に…。

一話

休暇を満喫した俺達が仕事に戻って数日、我らが曹操軍は賢姉の指揮の下に賊討伐の準備を行っていた。

陳留では賊の数は減少してきてはいるが、前にもいった通り、近隣の太守や州牧が無能なせいで全体的な数は増え、何やら不穏な空気が大陸を覆い始めている。それを感じた賢姉は、賊の討伐を名目に軍を動かし、名を上げようとしているわけだ。

かく言う俺も、この数日はまさにてんてこ舞いであれこれとしていたわけで。中途半端に頭が回るのは考え物だな……。

そして今、俺は城壁の上に腕を組んで立っている。別に暇だからかつこつけてるわけじゃないぞ。糧食を任せた誰かさんの報告を待っているだけだ。

賢姉の趣味と実益を兼ねて定期的に行っている仕官募集で、たま面白い文官志望がいた。

その時の試験官は俺じゃなかったが、秋蘭曰く「手際がいい」らしい。文官が不足している俺達にとってはうれしい話だが、実際に仕事が出るかどうかはまた別の話だ。それを見る上で、糧食を任せただが……。

「……遅い」

待つこと一刻。

これほど待たせてまだ来ないとは……。誰かさんはよほどいい根性をしているらしい。

さつきから俺の後ろをちよろちよろと走り回っている誰かさんは特に。

猫の耳を模した頭巾を被った、小柄で若干垂れ目な、性格がきつそうな文官風の誰かさんは、書簡を持って一刻ほど前からこの辺りをうろつろつとしている。誰かを探しているのは一目見れば分かる。誰を探しているのかも分かる。そしてそれが何処にいるのかも。

これはあれか。上官を甘く見ているのか。

「おい、猫」

こめかみを震わせながら、とりあえず声を掛けてみる。
しかしそれを誰かさんは華麗に無視してくれた。まるで俺がいなかのように見事に。

「お前だ、猫」

もう一度声を掛ける。

無視。

ああ、なるほど。これが無視される人の気持ちなのか。
確かに怒りたくもなる。

眉間を押さえて一度大きくため息を吐き、すう、と空気を吸い込む。

「……………そのお前だ!!!!!!!!!!!!!!」

これでもかというくらいに声を張り上げ、城中に響き渡るほどの

声量で怒鳴る。

びりびりと空気が震えた。

それでようやく誰かさんは動きを止め、涙目になりつつも勢いよく俺に振り返って睨んでくる。

「な、何よ！ 私はあんたみたいな男に用はないわ！」

負けじと怒鳴り返してくるが、その姿は怯えて威嚇してくる猫そのもの。

これが期待の文官かと思うと、些か不安になってくる。

「お前が苟？ だな？」

こんな姿を見せられたら怒気も失せてしまい、呆れ半分で一応の確認をする。

「そうよ！ 何か文句ある！？」

ある。大いにある。主に態度や言葉遣いに。

そう思いながらも出かかった言葉を飲み込み、努めて冷静に次の言葉を選ぶ。

「お前に任せた糧食の帳簿がまだなんだが？ まさか、まだ出来ていないなんてことはないだろうな？」

「何で男のあんたにそんなこと教えなくちゃいけないわけ？ だいたいあんた誰よ？」

まさか変態！？ 近づかないで妊娠するでしょ！」

変態って……。ってか近づいただけで妊娠するなら今頃は国中

が子沢山になるだろう。

「俺がその責任者の曹丕だからだ」

だからな、さつさとその書簡を渡せ。こっちはお前に付き合っているほど暇じゃないんだ。

俺が名乗ると、苟？の顔色がさつきとは打って変わって別の意味で怯えた顔になり、ピタリと罵声が止んだ。

この猫、俺の顔を知らなかったのか。そうでもなければあんな事は言えないよなあ。

桂花 side

え？ ちょっと待って。この男が曹丕？

確かに何処と無く曹操様と似てる気もするけど、え？

ということは、私、曹丕様に向かってあんな事言ってたの？

血の気がさつと引いていくのが自分でも分かるくらいに青ざめる。

曹姉弟の仲の良さとその才覚は有名だ。この一帯の州で曹姉弟を悪く言う者はまずいないほどの善政を敷き、また才能ある者ならどんな身分でも取り立てる一風変わった人柄。姉弟で街を歩いているところもよく見られているらしい。

そんな方々だからこそ仕官したのに、早速やってしまった。自分

のこの口が嫌になる。

曹不様は寛容な方だと聞いているが流石にこれは絶望的だろうな、と他人事のように思った。

男が相手だと、何故か私は口が悪くなる。

別に本当に男が嫌いなのではない。ただ気づいたら罵声が飛び出している。そのせいで今までもろくに男と話したことがなく、影で色々と言われていた事も知っている。でも、どうしても治すことが出来ない。自分ではどうしようもないと諦めているし、今まで男の上官が居なかったこともあってどうとでもなった。

でも今回はそれが仇となった。

このままでは良くて追放、最悪の場合曹操様に会う事無く斬首。

いや、でもここで何とか私の事を認めさせれば、私が考えた通りになるんじゃない？

「荀？」

「は、はい」

いきなり名を呼ばれ、強張りながら返事を返す。

「とりあえず、その書簡を渡してくれるか？ 結構急ぎなんだな」

「あ、申し訳ありません！」

急いで抱えていた書簡を曹不様に手渡す。

曹不様はそれを受け取り、内容に目を通す。

その顔がどんどん険しくなっていくが、それは計算のうちだ。

読み終わった曹丕様が顔を上げる。

さあ、どつくる？

華景 side

これはまた、面白いなあ。

何が面白いって、頼んどいた糧食が半分しか用意されていない。どう考えてもこれはわざとだよなあ。なかなか面白いとは思っていたが、まさかここまで面白い子だとは思わなかった。

俺、そんなに舐められてるのか。

読み終えて顔を上げると、ちょうど賢姉と夏侯姉妹が城壁に上がってきた。

「華景様、何かあったのですか？」

春蘭が控えめに尋ねてきた。

それに笑顔で頷くと、賢姉に書簡を手渡す。

「これは？」

「なかなか愉快的な糧食の帳簿だ。ここまで面白いのは久しぶりな気がする」

俺の不可解な言葉と笑顔に首を傾げながら賢姉も書簡に目を落と

す。

読み進めるうちに俺の言葉の意味を理解したらしく、顔を上げたときには賢姉も俺と同じ笑顔だった。

「で、これの監督官はどこにいるのかしら？」

「この子だよ」

言いながら荀？の背を押して賢姉の前に立たせる。
荀？はすぐに臣下の礼をとって賢姉の前に跪いた。

「そう。貴方がこれを？」

「はい。」

十分な量は準備したつもりですが、何か不備がありましたでしょうか？

十分？　これがか？

いやいや、不備ありすぎて問題なんだが？

「どこが十分な量なのかしら・・・？」

指定した量の半分しか用意できていないじゃないの！」

賢姉がそういうと、後ろで夏侯姉妹がそういうことかと納得したように頷いた。

「このまま出陣していたら糧食不足で行き倒れるところだったわ。そうだったら、貴方はどうやって責任をとるつもり？」

「いえ、そうはならないはずです」

自信ありげにそう言い切って賢姉を見る荀？。
何を根拠にそう言っているのやら。

「ほう。それは何故かしら？」

賢姉の目が光る。

「三つ、理由があります。お聞きいただけますか？」

「いいでしょう。それが納得のいくものなら今回の事は不問にしてあげるわ」

納得いかなければ処罰する。

賢姉がしなければ、俺が。

「ご納得いただければ、それは私の不能がいたす所。
この場で我が首、刎ねていただいて結構でございます」

「……なるほど。それほどの覚悟を持って望むか。
これは何を言うのか見物だな。」

「……一言は無いぞ？」

「はっ。では、説明させて頂きますが」

荀？が一拍いれる間に、賢姉達の隣に立ち位置を変える。
聞くなり正面から聞いたほうが面白い。

「まず一つ目。」

曹操様はとても慎重なお方ですから、糧食の最終確認は必ずご自身でなさいます。

そこで問題があればこうして責任者を呼び出すはず。ですので行き倒れにはなりません」

こいつ………！

反射的に大鎌に手を添えるが、それよりも早く賢姉が激怒していた。

「なっ！　ば、馬鹿にしてるの！？　春蘭！」

「はっ！」

そこではっと思い返し、慌てて賢姉を止めにかかる。

「賢姉待った！　後二つ、理由が残ってる。首を落とすのはその後だ」

ここで首を刎ねたら約定を破ることになる。
それはまずい。

「華景様の言うとおりです、華琳様。それに先ほどのお約束は……」

俺と秋蘭の言葉に賢姉は振り上げかけた大鎌を止め、少ししてから短く息を吐いて力を抜く。

「………そうだったわね。で、次の理由は？」

「はっ。二つ目は、糧食が少なくなれば輸送部隊が身軽になり、行

軍の速度も上がります。

その結果、討伐行全体にかかる時間が大幅に短縮できるでしょう」

確かにその通りだ。

糧食が少なければ『行軍速度は』上がる。

「んん？　・・・なあ、秋蘭」

「どうした、姉者？　何かあったか？」

「行軍が早くなっても、賊の討伐自体が短くなることはないよな？」

「ああ、ならないぞ」

「そうだよな！　よかったあ。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ！」

春蘭の言うとおり。

いくら早く動けようが、討伐にかかる時間は変わらない。

そもそも行軍速度が上がると言っても、そこまで劇的な変化があるはずもない。

せいぜいが二割増し、良くて三割が関の山だ。

それをどう縮めるつもりだ？

「まあいい。それで、最後の理由は？」

「はい。・・・三つ目の理由は、私が提案する策を用いれば、

賊の討伐にかかる時間はさらに短縮できるでしょう。

よって、この量の糧食で十分だと判断いたしました」

「……………はあ。ほうほう。」

「曹操様！どうかこの荀？めを、曹操様を勝利に導く軍師として麾下にお加え下さいませ！」

なるほどなるほど。

こいつ、最初からこういうつもりだったわけか。
本当にいい根性してやがる。

「……………華景。この子、確かに面白いわね」

「だろ？ 言った俺もびっくりしてる」

熱い決意を胸に願い出る荀？と、それに驚く夏侯姉妹をよそに俺達は互いに笑いあう。

お互いに考えていることは同じようだ。

「荀？といったかしら。貴方、真名は？」

「はつ。桂花にございます」

「そう。桂花、貴方、私を試したわね」

「はい」

なんともすんなりと認めた。

これには流石に怒りを通り越して感嘆してしまふ。

だが、うちの將軍には逆効果だぞ。

「何い？ 貴様、いけしゃあしゃあと……！！」

華琳様！このような無礼者、すぐに首を落とすべきです！」

案の定吠え出す春蘭だが、桂花はそれに臆する事無く言い返す。

「あんたは黙ってなさい！

私の運命を決めていいのは曹操様だけよ！」

おうおう、言うねえ。切れてる春蘭に向かって、大した度胸だ。それとも、今は賢姉しか見えていないのか。それはそれで問題だな。

「き、貴様あ……！」

さらに怒り出して大剣を抜こうとする春蘭の肩を抑える。今此処で暴走されたら、賢姉がやろうとしていることの邪魔になる。

それは面白くない。

「春蘭、落ち着け。全ては賢姉次第だ」

「ぐっ、うう……華景様が、そう仰るなら」

顔を歪めながらも、春蘭は素直に大剣から手を放した。それを確認して、賢姉は桂花に話しかける。

「桂花。軍師としての経験はある？」

「はつ。ここに来る以前は、南皮で軍師をしておりました」

「・・・・・・・・・・そう」

南皮っていうと・・・ああ、麗羽のどこか。

あれだったら出て行きたくもなるな、確かに。

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう。」

それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「・・・まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。

まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るうこと、何を惜しみ、躊躇う事がありましたよ」

「・・・・・・・・ならばその力、私のために振るうことは惜しまない？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。
もしご不用とあらば、この苟？、生きてこの場を去る気はありません。」

遠慮なく、この場でお切り捨ててくださいませ！」

それを聞いて、俺は喉の奥でクツクツと小さく笑った。
賢姉が好きそうな性格してる。

「いい人材を見つけてきたな、秋蘭」

「我ながらそう思います」

賢姉は無言のまま、手に持つ大鎌の切っ先を桂花に向けた。
その顔はうつすらと笑っている。楽しんでるなあ。

「……桂花。私がこの世でもっとも腹立たしく思うこと、それは人に試されることよ。

分かっているかしら？」

「はい。そこをあえて試させて頂きました」

賢姉の手に力が込められる。

「そう。……なら、こうすることも貴方の掌の上ということね」

一瞬力を抜いたかと思うと、次の瞬間には大鎌を振り上げ、桂花に向かって躊躇せずに振り下ろした。

大鎌が風を切り、はらりと桂花の前髪が少しだけ舞い落ちる。

「……やっぱ、そうするよな」

大鎌の切っ先は寸分の狂いもなく、桂花の首の前で静止していた。
後少しでも動かしたら桂花はお陀仏だっただろう。

「当然よ。……でも桂花、もし私が本当に振り下ろしていたら、どうしていた？」

「その時はそれが天命と受け入れておりました。
天を取る器に看取られることは誇りこそすれ、恨むことなどありません」

口達者なのは、考え物だな。
軍師つてのは特に。

「嘘は嫌いよ。本当のことをおっしゃいなさい」

「曹操様のご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いな
いと思いましたので。」

避ける気など毛頭ありませんでした。・・・それに私は軍師であ
って武官ではありません。

あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでし
た」

「そう・・・」

小さく呟いた賢姉が、桂花に突き付けていた大鎌をゆっくり下ろ
す。

「・・・ふふつ、あははははは！」

「か、華琳様・・・？」

突然笑い出した賢姉に夏侯姉妹が戸惑うが、それにはお構いなし
に賢姉は言葉を紡いだ。

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。
あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にす
る。いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。

糧食はこれで十分と言ったのだから、もし不足したならその失態、身をもって償ってもらわよ?」

「御意!」

さあて、これからは楽になるといいがな。

一話（後書き）

長い！ 我ながら長い！

そして桂花がどこことなく小心者に？

すいません、これが私の限界でした・・・。

二話（前書き）

前の話が長すぎたから今回は短めにしますた。

二話

かくして、新しい軍師を迎えた我らが曹操軍は、意気揚々と出陣した。

いや、意気揚々つてのは言葉が悪いか。粛々と厳格に、だな。

晴天の下、俺は先頭だつて馬を進ませる。

一応これでも賢姉の弟で武官筆頭だからな。俺が先頭にいることで士気が高まることもある。

ちなみに賢姉は軍の中程に桂花と、その護衛と言う形でそばに秋蘭もいる。

春蘭は俺の隣で若干不機嫌そうに不貞腐れている。

大方、賢姉の傍にるのが桂花だから不服なのだろう。

「そう怒るなよ、春蘭。今回は仕方ないだろう？」

「むう。ですが、何故新参者のあやつが華琳様のお傍に・・・」

「昨日あれだけ相手をしてもらっただろうが。今はあれで満足しときなさい」

「それとこれとは話は別です！」

先刻からずっとこんな調子で拗ねるもんだから、とてもじゃないが手に負えない。

賢姉か秋蘭がいればどうにかなるのかも知れんが、それは無いものねだりというやつか。

「華琳様の決定ですからあやつが軍師となるのは仕方ないとは思いますが、あの泥棒猫が華琳様のお傍にすることに納得できません！」

「いや、納得する云々の話ではなくてだな……」

「あやつが来てからというものの、華琳様のご寵愛を受ける機会がめっきり減ったですよ!？」

何かにつけては出し抜かれてしまって、あやつばかりが

」

あー、誰か来てくんねえかな。

なんか勝手に白熱してすごいこといつてるんだが。

一人で盛り上がっている春蘭から目を逸らして空を見上げる。

天気いいなあ。雲一つない晴天ってのはこういうのを言うんだろ
うなあ。

あ、蝶々。

「姉者、華景様。華琳様がお呼びです どうかありませんか？」

「……あ？ 秋蘭か。いや、天気いいなあってな。すぐ行く」

空を仰ぎ見る俺を心配そうに見る秋蘭に適当な返事を返し、一人でしゃべり続ける春蘭を連れて、俺は賢姉の下に向かって後退していった。

「華景様と春蘭に、偵察部隊を率いて先行していただきたいのです」
本陣に着くと、軍議の場でいきなり桂花にそんな事を言われた。
もう少し順を追って説明してもらいたいものだが、なんとなく言
いたいことは分かる。

「一応聞くが、何の話だ？」

「先ほど先行していた偵察から報告がありまして、前方数里ほどの
地点に旗のない集団を発見いたしました。

報告を聞く限りではおそらく野盗か山賊の類と思われます」

「で、とりあえず様子見の意味でもう一度偵察隊を向かわせようと
思うのだけれど」

桂花の言葉を途中から賢姉が続ける。

軍議の前に報告が来て、二人で話し合ったのか。

それから軍議を開いて確認しているらしい。

「それで俺達か」

ふむ。俺としては特に文句もない。

強いて言うなら、よくもいきなり俺を顎で使いやがる、くらいだ。

だがそこで、正気に戻っていた春蘭が食って掛かった。

「ちよつと待て！ 何故そこで華景様が行かねばならんのだ！
偵察だけならば私だけで十分だろう！」

まあ、確かに俺じゃなくてもいいんだがね。春蘭の言つとおり。
ただ春蘭だけじゃあ不安なのも確かだわな。

「あんた馬鹿！？ ちゃんと状況判断が出来て、的確な指揮が出来る人が行かないと偵察の意味がないでしょう！」

追記するなら、それが出来る武官は俺の他には秋蘭のみ。
こんなことに賢姉は駆り出せないし。

春蘭？ いや、春蘭は……ねえ？

「ぐっ……！ それでは私が馬鹿のようではないか！」

言わない……。俺は言わないぞ……。お前は馬鹿
だとは……！

堪えているのは皆同じらしく、天幕の中を一瞬、静寂が支配する
空間と化した。

「……………」

「……………」

「……………」

「な、何故そこで黙るのですか！」

・・・春蘭。人には耐えねばならん時があるのだよ。

「・・・・・・・・まあ、とりあえず俺と春蘭が行けばいいんだな」

「はい」

「お願いするわね、華景」

「了解」

秋蘭に宥められる春蘭を横目に、軍議は終了した。

すまん、春蘭。また今度、賢姉に相手してもらおうように交渉するから。

二話（後書き）

春蘭の扱いが若干不憫な気がします。原作もこんなもんだっ
がします。

やりすぎだったらすいません。

続・二話（前書き）

三点リーダーを使ってみました
変だったら教えて下さい

続・二話

そんなこんなで先遣隊を率いて道を急ぐ俺と春蘭。

戦は楽じゃないのは分かっているが、まさかこうも早々と仕事が終わってくるとは思わなかった。我らが軍師殿の神経の図太さにはほとほと感心せざるを得ないな。まるで俺に恨みでもあるんじゃないかと勘繰りたくなるほどに。愚痴を言っても仕方ないのも分かっているが、どうにも桂花が俺を見るときの目に敵意を感じてしまう。いや、敵意というか、殺意？ よく分からないが目を合わせるたびに睨まれているような気がするんだよなあ。すぐに逸らされるし。

「……………なあ、春蘭」

「はい？」

「俺、先が思いやられるわ」

「は、はあ…………？」

俺の突然の言葉に疑問符を飛ばしながら首を傾げる春蘭。

何のことが伝わっていないが、説明するのも億劫なのでそのまま進んでいく。

これ以上後ろ向きな気分になる前にさっさと仕事を終わらせて帰ろう。

報告があつた辺りに到着すると、そこからさらに先のほうに確かにそれらしき集団が居るのが見える。数にして大体数十人くらいのいかにも野盗といった連中が何かを囲んでいるようだ。そして、その中心辺りで人が物理的に昇天している。新しい宗教の儀式だろうか？また物騒な儀式をする連中もいたものだ。

そんなどうでもいいことを考えながらさらに距離を詰めていくと、どうやら連中は小さな女の子を囲んでいるようだ。先ほどから上がっていた人間花火はその子が一人で行っていたらしい。というかあの子、なんつつ馬鹿でかい鉄球振り回してんだ？

「子どもが戦つてるな」

自分でも驚くほど冷静に、目の前の事を呟く。

「な！ 何ですと！？ 早く助けましょう！」

いや、行くつもりなんだが。

と春蘭に言う間もなく、彼女は颯爽と？ いや、猛然と賊共に向かって突撃していった。

春蘭。お前はそんなだから馬鹿にされたり猪呼ばわりされるんだぞ？

「あの…曹丕様、我々はどうすれば？」

見事に置いてけぼりを食らった後ろの部隊の一人が、戸惑いながら俺に聞いてくる。

どうって、あれを追いかけるに決まってるだろうに。

「誰か曹操様に報告に行け。それから何人か賊を泳がせるから、後を追う者を数人置いていく。それ以外はあれを追いかけるぞ」

あれ、と親指で春蘭を指し、返事を返す兵達と共に走り出す。

賊が束になって宙を舞う。俺が行かなくてもよくないか？

「まだまだあ……！！！！」

「でえええい！！」

掛け声をかけながらどんどん敵を吹き飛ばしていく春蘭と少女。どうみてもやり過ぎだろう。吹っ飛んで粉々になつてゐる奴とかいるし。血の雨って本当に降るんだな。

ただでさえ二人の怪力に薙ぎ倒されていた賊たちは、俺達が到着したことによりもともと無いに等しかった土気がさらに落ち、一人、二人と逃走を始めだした。これで後は追跡させて本拠地を探り出せばいいだけだ。……俺の仕事、無かったなあ。別にいいけどさあ、こう、武官として、ねえ？

「待てい！ 逃がしはせんぞ！！」

「お前が待てい」

さらなる暴走を始める前に春蘭の襟を引っつかんで無理やり押し

止める。

「何故止めるのですか!？」

「あいつらには本拠地まで案内してもらったから、我慢しなさい」

「? ……おお、なるほど。おおい! 誰かある!」

「もうやってるからな?」

おお、春蘭よ。お前の愛すべき馬鹿さ加減が切なくなってくるぞ。

などと二人でじゃれ合っていると、少女が遠慮がちに声を掛けてきた。

「あの、助けて頂いてありがとうございました!」

髪を二つに分けて括っている活発そうな少女は、そういつて勢いよく頭を下げた。

礼儀正しい子だなあ。将来子どもが出来たときはこう育て欲しいものだ。でも鉄球を振り回すほどやんちゃなのは勘弁。

いや、そもそも相手がいない云々。

「おお! 怪我はないか? 勇敢な少女よ」

「あ、はい! 大丈夫です!」

仲が良さそうに笑いあう二人は、性格の似通った姉妹のように見えなくも無い。

というか、春蘭がちゃんと姉に見える！不思議！

「それはさておき、何でまた一人で戦ってたんだ？　これは勇敢と言っよりも蛮勇だぞ」

確かに一人で賊と戦うのは勇氣ある行動だろう。だが、それで殺されては元も子もない。

言い方は悪くなるが、勝てなければどれほど強かろうと無意味なのだから。

「それは……」

言い咎める俺に、気まずそうに話し出そうとしたところで、ちょうど後方から賢姉率いる本隊が到着した。

まるで俺達の事を見ていたかのように。

それに春蘭が手を振っていると、少女の表情がさっきまでの嬉しそうな顔から一変して驚きと怒りに変わったように見えた。

いや、怒りかどうかは分からないが、そんな風に見えた。

「報告は聞いたわ。ご苦労だったわね、春蘭、華景」

「俺はなーんもしてないけどねえ。全て春蘭とこの子がやってくれたよ」

いや本当に。俺ってば要らない子だったよ。

「もしかしてお姉さん達、国の軍隊………！？」

「ん？　まあそうだが……っ！！」

春蘭が答えた途端、少女が春蘭に向かって鉄球を振っていた。寸でのところで反応できた春蘭は迫り来る鉄球を弾く。そしてそれはそのまま俺の方へ

華琳 side

とつさに春蘭が弾いた鉄球が、ぼうつと立っていた華景に向かっていく。

突然の事に呆気にとられていた私はそこではつと我に帰り、未だにぼさつとしている愚弟に叫んだ。

「華景！ 前を見なさい！」

鉄球が目前に迫ってきて、ようやく華景は動き出した。

ギリギリまで来た鉄球を大きな音を立てながら思い切り蹴り上げ、それに少女が気をとられている間に素早く肉薄する。

それに反応し切れなかった少女の背後に回り込むと、少女の腕を捻り上げて首に大鎌の刃をあてがった。

少女は武器を落とし、地面に倒される。

「あう！」

「……で、この子殺していいのか？」

普段とは違う、酷く平坦で感情がこめられていない声で、少女を睨むでもなく見下ろす。

対する少女は身動きできず、ただ華景と私達を睨んでいた。

「待ちなさい、華景。まだこの子には聞きたい事があるのよ」

放っておくと本気で殺してしまう。

華景に待ったをかけ、押さえている少女を解放させる。

華景は少女を放しはするが、鋭い視線だけは決して離さず少女の背後に立ったままだ。

手にしている大鎌も何かあればすぐに首を刈り取れるように構えている。

華景が、少女を敵と認識してしまったようだ。

これは少し急いだほうがいいわね……。

「貴方、名前は？」

「……許緒」

「では許緒。何故いきなり攻撃してきたの？」

私が問いかけると、許緒は先ほどよりもさらに厳しい目で私を睨む。

「役人なんか信用できるもんか！　ボク達を守ってくれないくせに税金ばかり持っていつて！！」

それは盗賊から守ってもらえなかった民の総意。

統治者として民にもつとも言わせたくない言葉。

許緒はそれを力の限り私に叩きつけてくる。

「ボク達がどれだけがんばって育てても全部役人が持つていく！
何もしてくれないくせに！

賊が来ても、病気が流行っても、何も！だからボクがみんなを守るんだ！

ボクがみんなを盗賊からも……役人からも守るんだ！！」

この子はきつと、こんな事を言った後に処断されてしまうことも分かっている。

それでもなお、言わずにはいられない。それほどまでに、民は追
い詰められている。

少女の絶叫を聞く皆の顔が歪んでいた。

華景の鎌がピクリと動く。

攻撃の意思はなく、華景は構えていた大鎌をゆっくりと下ろして
私を見た。

「……………そう。許緒、ごめんなさい」

私は激昂する許緒に、身分など気にもせず深々と頭を下げた。

ここは私が治める領地ではない。だとしても、同じ為政者として
謝りたかった。

この国の民である許緒に、この国の為政者として。

「華琳、様……………」

「華琳様……………」

「何と……」

「え？ あの……！」

頭を上げ、予想外の事に一人慌てる許緒に改めて向き直る。

「そういえばまだ名乗っていなかったわね。私は曹操。山向こうの陳留の街で、刺史をしているものよ」

「山向こう？ ……あつそれじゃっ！？ ご、ごめんなさい！」

私が名乗ると、今度は許緒が深々と頭を下げてる。

「山向こうの街の噂はよく聞いています！」

向こうの刺史様はすぐ立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなったし、盗賊もすぐ少なくなったって！

そんな人に、ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、わたし達が一番よく知っているもの。」

官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

まだ気まずそうにする許緒に首を振る。

この子が謝る必要はどこにもないのだから。

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないかしらっ？」

「え……？　ボクの力を……？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。」

「だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇気を、この私に貸して欲しい」

「華琳さまが、王に……？」

「ええ」

「支配者ではない、為政者として。帝ではなく、王として。」

「戦をするためではなく、戦を終わらせるために。」

「あ、あの、曹操様が王様になったら……ボク達の村も守ってくださいか？」

「盗賊もやっつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでも……。この大陸の皆が平和に暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

私の言葉をかみ締めるようにゆっくりと、許緒は繰り返した。

続・二話（後書き）

もう今日は思いついたネタをどうやって本編にねじ込もうかとばかり考えていました。

ああ……早くあのキャラのところまで進めたい……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172z/>

恋姫無双 曹丕伝

2011年12月21日18時51分発行